

屋久杉工芸

詰まった木目、光沢のある輝き、独特な香りなどから、屋久杉を使った工芸品は高い人気を誇っています。この木材は樹齢 1,000 年を越えており、また 2001 年には伐採が禁止されたため、特に珍重されています。製品は倒木や数百年ほども前に行われていた伐採の残材を使って作られています。

貴重な木材

屋久島の木材産業は 1960 年代にピークに達し、それ以後衰退しました。樹木の保護を確実にするため、伐採は 2001 年に禁止されました。現在の木工は主に材木の端材や伐採された木の切り株、また自然倒木などを使用しており、これらは総称して土埋木、すなわち屋久杉端材として知られています。島民が屋根板という形で税金を支払っていた江戸時代（1603～1867）には、木目の真っ直ぐな材木が必要であったため、木こりたちは地面から二メートル以上の高さで屋久杉を伐採することで複雑な木目柄を持つ根部を避けていました。土埋木は、苔に覆われているときは使い物にならないように見えるものの、防腐・抗菌・防虫効果のある樹脂を多く含んでいるおかげで湿気の多い森の中でも保護され、損傷のない状態で残されています。

土埋木は標高 1,000 メートル前後の山奥で見つかるため、まず扱いやすい大きさに切断してから運び出す必要がありました。1920 年代には、伐採された屋久杉を沿岸の安房、宮之浦、永田、栗生に運び下ろすために四本の森林鉄道が建設されました。発電所やダムのメンテナンスのために運行を続けている安房鉄道の一部を除き、すべての運行は停止されました。屋久杉の輸送にはヘリコプターも使われていましたが、これも土埋木資源が全体的に減少したことで 2015 年に終了しました。工房は、以前は屋久島や鹿児島島の材木置き場に持ち込まれて競売にかけられた土埋木を落札していました。しかし、土埋木の減少により入札が行われなくなり、現在では林野庁と屋久杉銘木協同組合の間で締結された随意契約に基づいて、年に二回少量が販売されるのみとなっています。この組合がその後、随意契約に基づいて加盟企業に土埋木を販売します。

雨や霧の多い森林環境から運ばれてきた木材はすぐには処理されず、原木の大きさによって数ヶ月から数年の間、自然に乾燥されます。木材が乾くと、熟練した職人が旋盤を使って屋久杉をさまざまな製品に仕上げていきます。小杉一樹齢 1,000 年未満の若いスギも安価な工芸品を作るために使用されているので、購入者は自分が買おうとしている物が本物の屋久杉製品なのかどうか確認するとよいかもしれません。

一点ものの工芸品

屋久杉がまだ丸太の状態であるときにその木材品質を見極めるには、経験豊富なプロの目が必要です。屋久杉の工芸品には大きな家具から、箸やドリンクコースター、キーホルダーなど、より手頃な価格の小さな作品までさまざまなものがあり、みな観光客に人気のア

アイテムです。木目が細かく、塗装がしやすい木材なので美しい仕上がりになり、傷や乾燥から木材を守ります。またこの木材の樹脂は使うほどに光沢を増していきます。